

渡瀬昌忠著作集〈補卷二〉『万葉記紀新考』

近 藤 信 義

渡瀬昌忠博士の著作集八巻および補巻（おうふう）は平成十四年九月から同十五年五月までの間に毎月出版され、次いでこの度、補巻二として『万葉記紀新考』（平成二十四年十月）を上梓された。発表論考は平成十六年から平成二十四年まで、したがって、著作集完成からさらに新たな論考が加えられたものと拝察する。本書の書評を預かる身はもとより浅学ゆえ適任とは思われないが、氏の聲咳に接するものの一人として本書からのメッセージを分かち合う気持ちで記してゆきたい。

氏の論考の全体像（後注参照）は万葉歌人の柿本人麻呂論と呼び得るもので、その勢力を傾注された人麻呂研究と、そこから展開した万葉研究（記紀を含む）の諸論考とによって形成されている。この中であって、二つの補巻には長年

継続的に歌誌「水甕」に掲載された万葉歌の読み解きが「（新）万葉一枝」として一括されており、氏ならではの万葉歌への接近の方法が短編の中に具体的に読みとれ、魅力的なもう一つの相貌を見ることが出来る。こうした累積は歌誌同人以外の目には触れにくいものであって、このたび著作集に一括掲載されたことは有効な編集として受け取っている。

『万葉記紀新考』は人麻呂と若干距離をとりつつも人麻呂論とは離れずに、あらたな万葉集の歌集成立の論、考古学の進展に即応して着想された論、それらに加えて万葉歌の読解の部分、すなわち「新・万葉一枝」から構成されている。なお、本書の構成は次のような目次で示される。ただし「新・万葉一枝」は、多彩・多量な内容なので要旨把

握の部分で簡略に記すことでお許しを得たい。

目次

I 万葉記紀新考

一 万葉集雑歌史の出発―書名から部立名へ―

二 日本古代の島と水鳥―巢山古墳と記紀の雁産卵―

三 「島の宮」の「島」新考

四 天皇・皇子の葬送の道―天智・皇子の殯宮挽歌を中心―

五 井出至著『遊文録説話民俗篇』を読む

II 新・万葉一枝

(一) (六十)・(完)

III 余滴

一 経緯なき織物―み吉野の青根が峠―

二 対談 渡瀬昌忠 + 上野 誠

○ 要旨と評

I 「『万葉集雑歌史の出発―書名から部立名へ―』は歌集としての万葉集の成立に関する氏の主論文「日本における『歌集』の成立」(著作集第五卷「万葉集と人麻呂歌集」所収)の補論となるものである。氏の万葉集成立に関する見解は、原万葉とみなされる資料として人麻呂の手によって年代順に整理されていた『雑歌』と呼ばれる倭歌集があり、この原資料から万葉集編纂時に相聞・挽歌を抜いて別

立てとしたことよって残った歌々が「雑歌」であって、それ故に部立てとして冒頭に立った、という点にあり、その「雑」の典拠は隋書経籍志(集)に見られる『雑賦』『雑詩』『雑碑』『雑論』『雑詔』などに依ったのであろう、とするものである。

本論は右の氏の持論の補考となるもので、「雑」の意義を徹底させたものである。従来三大部立ての「雑歌」には宮廷における公的・祭儀的な歌という意義を持つと云われ続けているが、「雑」にはそうした意味はなく、さまざまな歌と言うのが原則と指摘する。にもかかわらず三大部立ての冒頭に位置づけられるのはなぜかと問い、その理解として、「やがて、個人間の恋歌のやりとりと死者への悲歌とが、宮廷生活において重視されるようになり、享受上、創作上の必要から「相聞」「挽歌」の部立てのもとに、その分類に入れるべき歌々が抜き出され」その結果が現在見られる巻一の体裁であって、「公的で清明なめでたさを強めた歌群ともなっていた」が、それらは宮廷行事や国見歌や行幸地賛美やのさまざまな歌、すなわち本来の「雑歌」の意義が引き継がれていると見るのである。

右は氏の描いている万葉集成立の原風景であるが、この所論は既に三十年以前に提出され、また、同時代の万葉集成立論の盛んな時代の緒家の中に提出されていたにも関わ

らず、渡瀬論に対する明確な評価・反論が見出されないままに取り残されていると思われる点が問題であろう。それ故の苛立ちも本論にはある。万葉集成立論は次にどのような検討期が訪れるものか、この魅力に富んだ仮説への検討はその時まで待つのであろうか。

「二日本古代の島と水鳥―巢山古墳と記紀の雁産卵―」は考古学の発掘・報告を積極的に文学上の知見に応用・展開するもので、氏の研究手法の特徴を示すものの一つである。本論は平成十五年十月に調査報告された巢山古墳（奈良県広陵町・4世紀末5世紀初め）の現場報告から、比較された津堂城山古墳（大坂藤井寺）、宝塚古墳（三重県松阪市）を対象として、とりわけ注目した島状遺構とその先端に見出された水鳥埴輪をめぐる所論である。氏の古墳に対する見解は、島をとりまく周囲の水は海の象徴であり、水鳥埴輪は霊を運ぶ白鳥・雁が模されており、常世の水辺の景を再現するものであると見る。

この洞察から氏は仁徳天皇の日女島ひめしまでの天皇と建内宿禰たけしらのすくねとの問答歌（記歌謡71～73）、書紀の「茨田堤に雁産めり」まもとのつみ かりこうの記事とその歌謡（紀62・63）の「雁卵」かりこの意義を追求する。氏は「雁卵」は仁徳代に奇跡的に水鳥の人工飼育に成功した技術者（韓人）への驚嘆・賛美であり、常世（生命の原郷・理想郷としての他界）を現出する島状古墳の水鳥

埴輪を造形させた力にもつながり、こうした造形は生ける王者の霊力強化のためにも存在したと展開する。

「三「島の宮」の「島」新考」は右の論考からの展開である。「島の宮」は日並皇子である草壁の居所であり、用例は彼の殯宮時の挽歌群（②170～193）中に見出される。この「島」は従来居所の庭園とするのが一般的見解として通用していた。しかし、氏は右の巢山古墳の島状遺構をヒントにして、「島」の字義を再度検討すべきことを提案し、当時中国から到来している文献類、我が国の記紀・風土記等の博引検証によって、結果「島」は海中の島であることを確認する。ここを基点に我が国の王権神話を幻想する祭祀がいずれも海を背景とする儀礼であり、「島」に常世の現出を幻想し、故に国土統治者の霊力・呪力の付着の祭儀の意義を確認する。したがってこの「島」は、古代中国にあっては神仙思想にもとづく蓬莱山、百済・新羅の王宮近くに造営された池中の島など、古代東アジアに共通する思想にもとづくものとみる。

右の考証を経て日並皇子殯宮時の挽歌群にしばしば詠み込まれている「み立たしの島」ひなみしのみこひんきょうの理解へと導く。たとえば「み立たしの島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年替はるまで」いへ（180）と詠まれる「島」は、本来皇太子が王権の神事・祭儀を行い、王者としての呪力を身につけるために立つ「み

立たしの島」であったものを、皇太子の死によってすべてが空しいものとなり、その喪失感をあらわすものとなり、その点景の「鳥」も皇子に生命力を保持させるべく放たれていた水鳥なのであったとし、皇子への悼み方を読む。

「四 天皇・皇子の葬送の道―天智・皇子の殯宮挽歌を中心に―」は万葉集の挽歌がどこで歌われているかの場を検証し、その上で悲傷の語の必然を説明する論である。

対象とするのはまずは天智挽歌群②147～155の中の「大殯の時」の歌②151～154である。ここには「殯宮」の語はないが「大殯」は近江の宮の南庭に営まれたまさしく天皇の「殯宮」であり、天皇の霊との最終的な別れの場での四首であろうことを歌の流れを追って論証する。この歌中においてとりわけ「船」「鳥」が歌い込まれるのは、生前の大御船への回想を詠いながら、なお、かつて前代の天皇の葬送が「靈柩船」をもつて難波から海を隔てた他界へ送られた儀礼の面影を残したものであることを指摘する。

一方「高市皇子尊城上の殯宮の時」②199～202の場合、すなわち皇太子であっても、その「殯宮」は生前の居所から遠く離れた「城上の宮」において営まれ、その道筋には境界が必ず歌い込まれ「殯宮」へのルートが示されている。したがって「殯宮」の場が永遠の別れの場となっているのであって「殯宮」から墓陵の歌はない、そこに皇子挽歌が

居所からの隔絶感が際だつ理由があると指摘する。

このように「殯宮」の歌が具体的な場に支えられた構造を持つことを論証して行くのであるが、この論の背景には先の巢山古墳から発掘・報告された「靈柩船」と絡み合う論であることが注意される（補記138、139頁必見）。

右のように論旨を簡略に紹介してみると、分かりやすくなった分、そこに展開されている多面的に放射されている論考のヒントをことごとく落としてしまっていることが残念に思われる。氏の論考の特徴は、調査すべきことは調べ尽くす意志力、確固たる論証の手順、根拠と見通しをもった仮説などに加えて、ごく最近の考古学の発掘・報告に基づく着想があることであろう。発掘される遺構・遺品が語りかけてくるものは新たな構想の種子となろう。その想像に満ちた世界が個人的な理解からより共有しうる理解へと検証的にとり扱う評価・論評が、文学・史学・考古等の総合的古代学からの視野に立つて求められるところである。

○

Ⅱ「新・万葉一枝」は量的にも本書の主要な構成要素となっているのだが取り上げる余地が不足してきていることをお詫びしたい。歌誌「水薨」に連載された短編のエッセーである。全六十一篇は単独個別ではなく連続性がある。おおよそ防人歌関係、歌木簡関係、水鳥関係、花関係をテーマ

として論から論へと展開する。そうした中にハッとさせられる数々の見解・ヒントに出会う。

防人関係は駿河国を取り上げることが多い。その中たとえば、「父母が頭かき撫で幸くあれて…」²⁰ 432の「かき撫で」は他例から窺えば慰撫する、の意であって、従来云われる旅の安全を祈願する呪術的意味合いを読みとる必要があるうか¹⁸⁷頁、の問いかけ。あるいは駿河国防人歌の配列から、進歌の過程でそこに編集・構成の意図を見出そうとする¹⁹⁰頁前後。こうした着眼は駿河の一国の問題ではないだろう。「…何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ」²⁰ 432の助動詞「けむ」へのこだわり等々。

歌木簡には熱い目が注がれている。「安積山影さへ見ゆる山の井の…」¹⁶ 387の序詞部の解釈。「朝風ぎに来寄する白波…」⁷ 1391や、「難波津に咲くや木の花…」¹（古今序）の木簡らの歌が比喩歌であること²²⁹頁以下。同じく歌木簡の断片から類推される歌²⁵²頁前後から防人歌へと連想するアプローチ等々。

水鳥の歌からは「…鴨々鳴くなる山影にして」³ 375の「山影」は山が日光を遮って川に落としている暗い影の意の正訓字であって「山陰」とは異なること等々。

花の話題では「梅」が考古学の知見では弥生時代に稲作に伴われて渡来したものであること、したがって万葉関係

では奈良時代直前に渡来したとする常識の陳腐さを指摘³²⁷頁するなど。或いは卷十二の羈旅発思冒頭の人麻呂歌集歌四首がそれ以降の作者未詳歌の「古歌」の位置にあることの指摘³⁵⁶頁前後等々。

ほとんど全てを取り上げることが不可能だが、氏のこうした短編中に見出されるヒントと成果はあたかもマンガロップの林ができるように、花から種子へ、種子が水中垂下して次の茎を延ばすような連環の趣がある。そこに播かれている種子の数々は氏からのプレゼントのように思われる。せっかくの種子を見出し、拾い、育てるのも後進の者の努めでもあるう。以上、言は尽せないがこの辺りで筆を擱くことにしよう。

なお、皿余滴の「二対談 渡瀬昌忠＋上野誠」は、氏の研究に取り組む基本的な動機・態度が語られており、こうした対談企画が組まれて、肉声に接するがごとき機会を得たことを喜ぶたい。

(注)

渡瀬昌忠著作集（平成十四年九月二十五日～平成十五年五月二十五日）の総覧

第一巻 人麻呂歌集略体論上／第二巻 人麻呂歌集略体論下／第三巻 人麻呂歌集非略 体論上／第四巻 人麻呂歌集非略体

論下―七夕歌群論―／第五卷 万葉集と人麻呂歌 集／第六卷
島の宮の文字／第七卷 人麻呂作歌論／第八卷 万葉集歌群構
造論／補卷 万葉学交響

平成二十四年十月刊 A5 383頁

12,000円（本体） おうふう

（こんどう のぶよし・立正大学名誉教授）